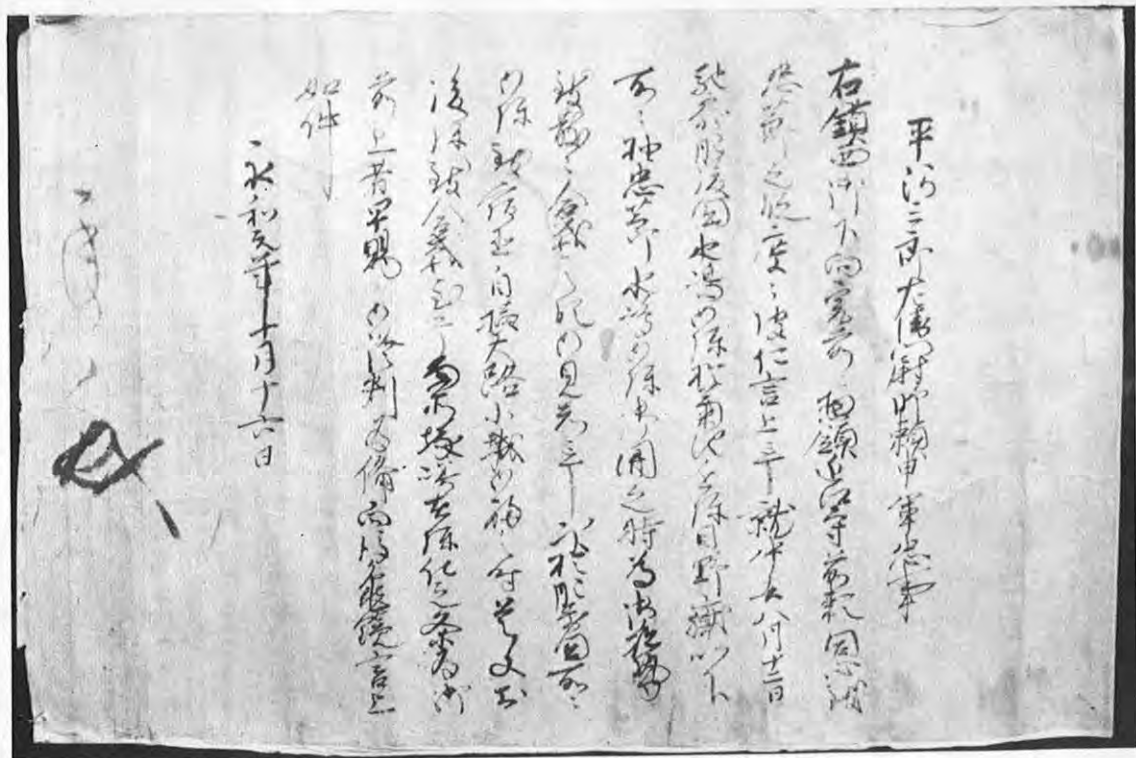


くまもとの
文化財

永池文書

球磨郡相良村



▲平河師頼軍忠状

球磨郡には、鎌倉時代から戦国時代にかけての古文書がたくさん残っています。そのうちの大部分は相良氏関係のもので、ここに掲げた永池文書は平河文書（球磨郡多良木町）とともに、平河氏という土着武士の動静を知るものとして、貴重なものとなっています。写真は平河師頼が、南北朝時代の永和元年（一三七五）有名な水島の陣に参加、北朝方に忠誠をつくしたことを証明したものです。左端にある花押（一種のサイン）は今川了俊のもので、

明日の熊本

私の提言

青年団活動と行政の在り方



私達の青年団はおおむね十八〜二十五歳の男女で構成し、現在、県下団員数約二万一千名であります。

歴史をさかのぼれば発端は遠く、室町時代に起源を発すると言われ、江戸時代に「若者制度」という名ではっきりとわかれ、任務として地域社会で町村警護、消防の役目、年中行事を中心とする社会娯楽等の活動をし、又、自からの

伊藤保次

学習機関として「若衆宿」「青年宿」をようし、自己学習にもはげんできました。明治時代になり新政府の名のもとに色々な施策が打ち出され、地域青年団が今まで行っていたものが新政府の施策として打ち出され、自分達の役目を追いついて、社会悪として放置されていた時代がありました。つまり、青年団は

新しい時代から取り残されていったので、この時期、青年団の復活を図る為にも努力したのは、行政当局でもなく学者でもありません。地域の教育者や篤志家でありました。なにも学生だけが教育を受ける権利を有するのではなく、地域青年も均等に教育を受ける権利を有するものとして、青年団の復興と育成に大きく貢献していきました。

大正時代には青年団にとって二つの大きな出来事がありました。その一つは政府が地域青年団を認めて、青年団に関する訓令を度々発し、しだいに行政が青年団の組織経営論に口を出し、地方長官であるとか、知事であるとか、学校の校長がその団体の長として君臨し、直接指導する官制化の方向をたどった事でありました。更にもう一つは、明治神宮のご造営に因っての青年団の労力奉仕でありました。

多少問題はあっても青年団が世の注目をあびるようになるきっかけとなり、その後の日本青年館建設へと大きく前進しました。正に日本青年運動の中核としての地位を固めていき、都道府県団を単位とする現在の日本青年団協議会の前身として大きな第一歩を歩み出しました。

- (一) ここで青年団の特徴をあげてみると、自然に発生発達した団体
- (二) 自治的団体

(三) 地方的単位を有し、全国的連絡団体

(四) 青年期の社会生活団体

(五) 目的とする修養は一般的等でありませぬ。

先程述べたように官制化された青年団は敗戦まで続き、敗戦と同時に新生青年団が誕生しました。

戦後、民主主義社会、高度経済成長政策、意識多様化の中で、我々の青年団は、団員数こそ減少してしまいましたが、確かに地域に根をおろし地域を基盤とした活動運動を展開しているのではありません。高度経済成長政策の中で青年は自分の生活、又、自分の事だけしか求めず、社会の事、地域の事等には関心を寄せない青年が増え、自分さえよければの精神で生きてきているので、団体活動に参加している割合は本県に於いても約二〇%弱にすぎないという結果が出ています。

団体活動を通じての社会参加は発達期の我々青年にとって、又、二度とない青春時代にかけてがえのない経験であると思えます。学校教育を終え直接社会に飛び出すのではなく、団体活動を通じてお互いに学習しつつ少しずつ社会になれていく事も必要ではないでしょうか。社会教育が遅れている原因のひとつに団体活動への参加が少い事も関係していると思えますし、行政がいかに団体活動参加をうながしても、当事者にその意志がなければ

ば空振りになり終る事になります。

最近、団体のリーダーの質の低下、私の無分別、自己中心的な考え方がはびこり、本来の目的を忘れて好ましくない方向に走る傾向が見受けられる事は、今後の我々の自主的活動を考え合わせると大変な問題であり、原因を追求していく必要があると思えます。

今迄、主に青年団の歴史について述べて来ましたが、我々青年団は自主団体であり、いかなる物に対しても中立であり、自分達の活動は自分達で企画、決定、実行し、まず自分達の手で足を原則として、それでも出来ない分を地域社会に協力をお願いしています。

豊かな人づくり、仲間作り等をスローガンに団体勧誘運動を行政自らの手で進め組織作りを行ない、団体の再編成をやり、行政自らが事業を企画、運営、実行、そして参集者として青年を集め、行政が音頭をとり行政主体型青年団体参加を進めても、先程述べた五つの特徴等を考え合わせると納得できません。あくまで当事者が主体性をもって活動し、自主性を尊重し、適切な指導、助言をおこなうことには常に連絡を取り合っている事こそ本当に互いの立場を生かす、更に団体強化育成にも連がるものではないでしょうか。

(青年団協議会会長)